

20世紀の始まり（1901～1915）、その8

《ヨウ素製造で育った企業家と企業》

1908年（明治41）、東京帝国大学の池田菊苗（生没年：1864－1881年）が、グルタミン酸を主要成分とする調味料製造法を発明し、特許を取ります。鈴木三郎助（生没年：1868－1931年）は、この特許の実施契約を得、翌年、「味の素」を発売します。

そして1914年（大正3）、川崎の多摩川沿いに工場を造り、風評（注1）にもめげず、成功を収めます。

化学の発見発明が、企業家と出会い、新産業となったわけですが、ここでは、その企業家が誕生した背景を紹介しましょう。それは、ヨウ素（注2）を巡るものです。その発見は、皮肉にもナポレオン戦争のときでした。イギリスに海上封鎖されたフランスは、爆薬の原料である消石灰が輸入できず、自国生産を余儀なくされます。この消石灰を得る一つの方法が海藻を燃やすやり方でした。このとき、副産物としてヨウ素が存在することが発見されたのでした。（新元素であるとの発表は、1813年、注3）

ヨウ素は、人体に必須の元素であるばかりか、消毒液などの医薬品として使用され、明治時代となると、日本も、海藻「かじめ」を焼成して生成し、販売するようになります。その産地が伊豆や千葉でした。

伊豆で成功を収めたのが、三郎助であり、味の素の創業者となります。千葉で成功を収めたのが、森轟昶（のぶてる、生没年：1884－1941年）であり、1931年（昭和6）窒素肥料（硫安）を初めて国産化した「昭和肥料」を創業、また1934年（昭和9）アルミ製造国産化にも成功し「昭和電工」を創業します。

「昭和電工」は、現在、京浜臨海部に工場があり、最近は、工場夜景クルーズの対象となっています。

ちなみに、硫安製造に関し、森轟昶のライバルに、外国技術を使って製造した野口遵（したがう、生没年：1873－1944）がいます。こうした事業家が、化学分野で、現在に繋がる日本の産業を創っていきました。（注4）

なお「化学」の言葉は、深川においてセメント国産化に成功した宇都宮三郎（工部省技師、後に東京大学教授）が、ケミストリーを和訳して広めたものです。

注1：大正時代、「味の素の原料は蛇である」という風説が流行し、売り上げが激減した時期もありました。

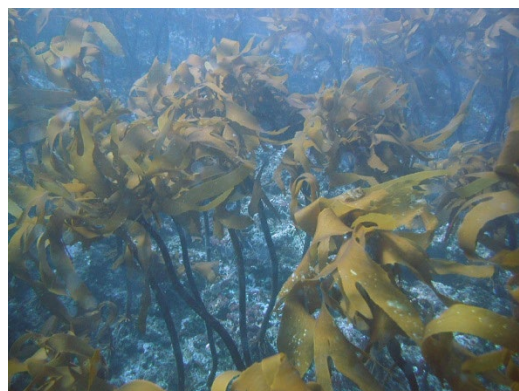
注2：ヨウ素（元素記号 I）は、人間の甲状腺にあって代謝機能を調節するのに重要な役割をもち、またヨウ素化合物は、消毒などの医薬品として医療分野で使用されています。昔の写真では、ヨウ化銀を塗ったフィルムが使われました。人工ヨウ化銀を空中に撒くと、人口降雨を降らせるため、人工降雨の実験に使われたこともあります。現在、チリと日本が主要生産国であり、千葉県において日本の生産量の8割が製造されています。天然ガスが溶け込んだ水溶液から抽出されています。

注3：そもそも、メンデレーエフによって元素の周期律が提唱されたのが、1869年（明治2年）のことですから、当時、新しい元素が体系的に理解されていたわけではありません。

注4：野口遵は、水力発電から生まれる電力を利用し、化学製品を生産します。カーバイド生産に始まり、硫安製造、化学繊維、プラスチックと事業の幅を広げ、日窒コンチェルンと呼ばれる財閥を形成するまでになりました。戦後、財閥が解体されて誕生したのが、「チッソ」、「旭化成」、「信越化学工業」、「積水化学」の会社です。なお、窒素肥料の生産に関しては、戦後、野口遵のチッソが水俣病、森蠱昶の昭和電工が第二水俣病（阿賀野川有機水銀中毒）という公害病を引き起こしています。

写真は、①かじめ（海藻図鑑掲載写真より）、②味の素川崎工場（AJINOMOTO NEWS 掲載写真より）、③昭和電工の夜景（HP「社会科」工場夜景クルーズ掲載写真）

①



②



③

